



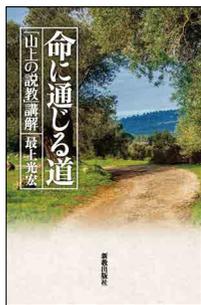
命に通じる道

「山上の説教」講解

8月10日発売

最上光宏 [著]

◆小B6判・184頁・定価1650円



キリストに従うとは、狭い門から入り細い道を歩むこと。日本の教会が陥りがちな信仰の個人主義化を憂い、牧会者として「世のための教会」の形成に心血を注いできた著者が、「今いかに主に従うか」という主の恵みへの応答の課題を22回の講解説教を通して考える。著者は日本基督教団隠退教師。

◆好評の既刊書から

山上の説教から憲法九条へ

平和構築のキリスト教倫理

宮田光雄著

◆定価1980円

山上の説教を生きる

八福の教えと平和創造

J・デアア著 / 志村真訳

◆定価2090円

山上の説教

終末時を生きる

井上良雄著

◆定価2420円

目次

1. 幸いなるかな!
2. 地の塩・世の光
3. まさされる義
4. 殺してはならない
5. 姦淫してはならない
6. 偽証してはならない
7. 復讐してはならない
8. あなたの敵を愛しなさい
9. 神の前での真実
10. 御名が崇められますように
(主の祈り1)
11. 御国が来ますように
(主の祈り2)
12. 心が行われますように
(主の祈り3)
13. 日毎の糧を
(主の祈り4)
14. 罪の赦し
(主の祈り5)
15. 試みにあわせず
(主の祈り6)
16. 天に宝を
17. 思い悩むな
18. 人を裁くな
19. 求めよ、さらば与えられん
20. 命に通じる道
21. 良い実を結ぶ良い木
22. 岩を土台に

● 5 月 刊 行

第一ペトロ書を読む

釈義と説教

石田 学著

◆四六判・定価 2200 円

差別と迫害に苦しむキリスト者に、自分たちは何者か、何を信じ、いかに生きるべきかを、力強く明確に語る。そのメッセージを、《釈義》と《説教》の2部構成を通して、現代の私たちに生き生きと解き明かす。



● 5 月 刊 行

ユダヤ人も異邦人もなく

パウロ研究の新潮流

山口希生著

◆四六判・定価 2475 円

信仰義認論を最重視する従来のパウロ理解に異議を申し立て、新約学界で激しい議論を呼んでいる「パウロへの新しい視点」(NPP)。その起源から最新の議論までをカバーした本邦初の本格解説書。



● 4 月 刊 行

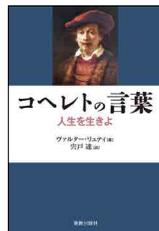
コヘレトの言葉

人生を生きよ

W. リュティ著／宍戸達訳

◆四六判・定価 2310 円

コヘレトをニヒリストとしてではなく、神への信仰に立って自らの人生を生きることを勧める人物として読み解く。傑出したスイスの説教者が1951年から翌年にかけてベルンで語った12編。(『伝道者ソロモン』を改訳・改題)



● 3 月 刊 行

交差するパレスチナ

新たな連帯のために

在日本韓国YMCA 編

◆四六判・定価 2640 円

注目を集めた連続シンポジウムの待望の単行本化。〈交差性〉の概念を手掛かりに考える。寄稿者＝ニダル・アブズルフ／金城美幸／北川真也／阿部小涼／保井啓志／中村一成／太田昌国／役重善洋／早尾貴紀。



ジャン・カルヴァン著／堀江知己訳

イザヤ書註解Ⅰ 1章-10章

イザヤ書註解は、カルヴァンにとって初めての旧約聖書註解であり、1551年に出版された。改革者がヘブライ語の深い知識に基づいて、どれほど真剣に預言書に取り組んだかが如実に伝わってくる。詩篇註解に比肩する膨大な分量であり、邦訳では全5巻となる予定。
A5判・予価6000円

辻 学著

牧会書簡 現代新約注解全書

牧会書簡と総称される第1テモテ、第2テモテ、テトスの3書簡を徹底的に読み解いた世界最高水準の注解書。『福音と世界』に70回にわたり連載された内容に加筆修正を施して遂に完成。邦語で類書のない極めて貴重な労作。
A5判・予価9000円

関口安義著

内村鑑三 闘いの軌跡

内村鑑三の激動の生涯を実証的な調査に徹して描き切った評伝大作。著者は芥川龍之介研究から出発し、芥川人脈に連なる多くの知識人の評伝をものしてきた。本書は2019年に上梓した『評伝矢内原忠雄』に次ぐ著者のライフワークであり、遺作となった。
A5判・予価8000円

フリッツ・リーマン著／赤坂桃子訳

不安とは何か その四つのかたち 「仮題」

不安に対処し、バランスの取れた人生を生きるためにはどうすればよいか。深層心理学的視点から不安を4つの類型・パーソナリティに分類し、対処法を豊富な例証と共に記述。1961年の初版以来今日まで100万部近くを売り上げた戦後ドイツのベストセラー。
四六判・予価3500円

●6～7月に出版の本と雑誌

カール・バルト

《教会教義学》の世界

寺園喜基著

広く自由な神の恵みの世界を精緻かつ壮大に描き上げた20世紀最大の神学書を道案内。
◆四六判・定価3080円

日本におけるキリスト教

フエミニスト運動史

富坂キリスト教センター編 1970年から2022年までフエミニスト運動の受容と展開を詳細な年表・解説・コラムで回顧。さらにメディア表象から異性愛規範への抵抗まで6つの重要課題を考察。
◆四六判・定価2750円

神と上帝

金香花著 聖書訳語論争への新たなアプローチ

19世紀中国の訳語論争の本質を、朝鮮語と日本語における聖書翻訳と比較しつつ、信仰の伝達と意味の翻訳の両面を手掛かりに考察する。
◆A5判・定価4400円

福音と世界

◆定価660円

8月号 戦争の時代に平和を問う「責任編集Ⅱ 声名定道

寄稿者：浅野淳博、徳田信、山中弘次、石川明人、朴賢淑、松隈協／連載 今高義也、後藤里菜、飯田華子、金耿昊、長尾優、C・J・サンダース&A・ヤーバー、山崎ランサム和彦、山口陽一、勝村弘也

安倍元首相の銃撃事件をきっかけに、旧統一協会をはじめカルトの問題がメディアで露出しだしてしばらく経ちます。それは画期的であると同時に、問題自体は以前から追及されていたという点では遅きに失する感もあり、なにより旧統一協会をはじめ反社会的なものの悪魔化だけが昂進していく「社会防衛」的な雰囲気も感じられ、個人的には距離を取って眺めていました。そんなわけで、急に量産されはじめた関連書籍群も読んでいなかったのですが、このたび手に取る機会に恵まれた『わたしが「カルト」に?——ゆがんだ支配はすぐそばに』（監修 川島堅二、著 齋藤篤・竹迫之、日本キリスト教団出版局）は率直に良著だと思えました。本書の監修・執筆者は、脱カルトの運動に長年携わってきた宗教学者、またそれぞれカルトの脱会者でもある二名の牧師。著者自身の経験、そして（これが厄介かつ重要なのですが）脱会後の生活における苦悩がつぶさに語られるとともに、カルトの定義、マインド・コントロールの問題、被害防止の提言などがわかりやすく論じられています。もちろんこれらは、巻末で紹介された類書にも共通する論点でしょう。ただ本書には、より重視すべき二つの読みどころがあると感じました。ひとつは、著者が自らの過

去を振り返り、「自分自身が加害者であった」とはっきり告白している点です。カルト組織の末端として行動してしまっただけというその告白は、全一三六頁のコンパクトな本書に、分量以上の重みを与えているように思います。もうひとつは、カルト問題の根源を社会そのものに見出そうとする姿勢です。先に述べたように、カルトはともするとこの社会の外敵として語られがちです。しかし、ほかならぬこの社会こそがカルトを容認し育てているのだとしたら、つまり、社会が反社会的なものを生み出しているのだとしたら、どうか。たとえば本書は、ドイツ帝国宰相ビスマルクの「飴と鞭」政策や、戦前日本で普選法と治安維持法が抱き合わせで制定されたことを、「政治カルト」と呼んで批判します。人々を表面的に懐柔しながら権利と主体性を奪い支配下に置くことが、いわば方法としてのカルトの本質なのだとしたら、その方法は一部の宗教に限らず社会全体に蔓延しているものではないか——そうした示唆をわたしは本書から受け取りました。ならば、放たれたあの弾丸はこの社会のカルト性を撃ち抜くところまで到達しうるのか。それはわたしたち自身が、「カルトからの解放」のためにいかに労するかにかかっているのだと思います。（堀）

福音と世界

2023年
9

A5判・80頁・定価660円・送料70円
年間予約購読料（送料共）8760円

特集・反日——その思想・行動・倫理

生真面目な反日——東アジア反日武装戦線

追悼・徳永五郎さん——「反日」の倫理

その思想と行動を振り返りつつ——松井悠子

ユウランシャのオオカミ——世界認識と「反日」の現在——友常勉

反日の条件をめぐって、沖繩で／を考える——新城郁夫

人／種主義から抜け出た「反日」——白丁と移住・難民労働者の動物（に對する）労働の中に——申知瑛

反日を上演する——テント芝居集団「野戦之月」の思想と行動——丸川哲史

【好評連載】

◆八木重吉の聖書 3 …………… 今高義也

◆神と「女性的なるもの」を辿って 4 …………… 後藤里菜

◆グレート小林と3人の女 5 …………… 飯田華子

◆私は告白する、私の神を 6 …………… 長尾優

◆地域から考える在日朝鮮人史と教会史 6 …………… 金耿昊

◆教会におけるイコノクラシヨン 17 …………… サンダース、ヤバハ

◆「日本のキリスト教」を読む 20 …………… 山口陽一

◆新約釈義 ルカ福音書 21 …………… 山崎ランサム和彦

◆古代イスラエル文学史序説 31 …………… 勝村弘也